

平成21年度 公開学術講座（調査・研究成果の公開）（④美05-09-4/5）

第43回オープンレクチャー「人とモノの力学」

企画情報部では、研究成果を広く公表するために公開学術講座を毎年秋に開催しており、本年で43回目を迎えた。昨年度同様、今年度も金曜日と土曜日の午後、2日間連続で開講し、聴講者の便宜を図るように努めた。今回も昨年度に引き続き「人とモノの力学」をテーマに掲げた。個々の講演内容は以下の通りである。なお、この講座は、上野の山文化ゾーン連絡協議会が主催して毎年秋に開く「上野の山文化ゾーンフェスティバル」の講演会シリーズのプログラムとしても企画されている。

今回は2日間でのべ258人の参加があり、参加者にアンケートを実施したところ、221人から回答を得た（回収率：85.7%）。結果は、「たいへん満足した」102人、「おおむね満足した」90人、「普通だった」13人、「不満が残った」2人、回答者の87%が満足感を得たことがわかった。

第1日：2009（平成21年）年10月2日（金）午後1：30～4：30、東京文化財研究所セミナー室

・土屋貴裕（東京文化財研究所）「『異国』をこしらえる―『玄奘三蔵絵』をめぐる―」

求法のため印度へとおもむいた玄奘三蔵の物語は、東アジアの仏教文化圏において様々なイメージを生み出してきた。日本においては、鎌倉時代後期、南都興福寺の周辺において「玄奘三蔵絵」という絵巻が制作されている。見たこともない中国・西域・印度という「異国」の地を、鎌倉時代の絵巻がいかに描いたのかを、「玄奘三蔵絵」、並びに同時代の関連作品から読み解いた。

・塚本麿充（大和文華館）「宋朝からみた日本僧―仏法・国土と文物交流の世界―」

日本は中国から多くの文物を受け入れてきた。では、中国はなぜ与え、また何を与えなかったのだろうか。今回は、仏教が重要な力をもった宋時代、それに引き寄せられるように入宋した人々を、中国社会がいかに受け入れたかを考えた。我々は見知らぬ相手もモノによって知ろうとする。当時の文物交流の世界から、中国にとって日本とは、そしてそれが東アジアの文化をいかに形成していくのかを考察した。

第2日：2009（平成21）年10月3日（土）午後1：30～4：30、東京文化財研究所セミナー室

・中野照男（東京文化財研究所）「大谷探検隊収集西域壁画の光学的調査」

東京国立博物館と韓国国立中央博物館が所蔵する大谷探検隊収集西域壁画は、ミーラン遺蹟、キジル石窟、クムトラ石窟、ベゼクリク石窟、アスターナ古墳などからもたらされた。それらの顔料や彩色技法を、光学的な手法や蛍光X線分析を用いて調査した結果、地域、時代、形状等による差がはっきりと見えてきた。炭素14による年代測定が導入されるなど、西域絵画の年代観の見直しが進む現段階において、大谷探検隊収集西域壁画の美術史的な位置付けを問い直した。

・白須浄眞（広島大学）「チベット宗教世界と大谷探検隊」

チベット宗教世界と大谷探検隊の密接な関係は、1908年の清国・五台山におけるダライラマ13世と大谷光瑞の弟・尊由との会談に始まる。英国のラサ侵攻によって蒙塵の身となっていた13世との接触は、チベットを焦点化する当時の国際政治社会に対するアクションと見なされ、以後、大谷隊は国際政治社会のなかに注視されていくこととなる。従来未承知のこの様相を、新たに見出した日英の外交記録によって解き明かした。